

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：千葉 柊作（臨床心理研究コース）

■ 研究題目
バウムテストにおける各種指標と自閉スペクトラム傾向の関連性についての研究
■ 研究代表者・分担者 氏名
千葉 柊作（臨床心理研究コース）（代表者）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
<p>目的</p> <p>心理検査は主として質問紙法や投影法を用いて、クライアントの心理状態やパーソナリティを測定する心理アセスメント技法である。特に投影法については、本人の意識していない部分が反映されることが知られているため、より詳細な個人の情報を知るうえで有用な手法の一種だと考えられる。一方で質問紙法についても個人の特性を数量で表現できるという特徴があり、統計処理等を用いることで客観的な指標として用いることができる。投影法検査は検査結果に出てくるいくつかの表現型を指標として解釈することで個人の特徴を理解するが、その解釈には訓練が必要であること、また結果の解釈がどうしても検査者の主観的評価を反映したものになることが問題点として挙げられる。そこで、投影法にて取り上げられる指標の出現数や出現率と、質問紙法で得られる各種得点との間で関連性を検討することで、投影法の指標に関する客観的な評価を得ることが可能となり、アセスメント時の知見として有意義なものになると考えられる。投影法の一つに Koch のバウムテストがあり（Koch, 1957/2010）、「木を一本描く」という手続きの簡便さから広く使用されている。本研究においてはバウムテストを使用して、バウムテストで得られる指標と各質問紙法で得られる心理特性との関連性を探索的に検討する。</p> <p>本研究で検討する心理特性は成人期の自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder : ASD）である。バウムテストで表現される木の形状について、ASD の児童を対象とした検討では空想的な木の出現などいくつかの特徴があることが示唆されている（廣澤・大山、2006）。そして、両者の関係について数量的な検討を行った研究はまず少ないものの、そのひとつとしては村松（2018）の検討がある。村松（2018）では、成人期の ASD 群と統制群間でバウムテストの描写に違いがあるかどうかを検討し、その結果</p>

「全2線枝」などいくつかの指標について、ASD傾向の有無と関連がみられたことが示唆されている。このように、バウムテストとASD傾向の間には何らかの関連性が見いだされると考えられる。ただし、村松(2018)の検討についてはいくつかの問題点も存在する。一つは、精神不調の交絡可能性を考慮していない点である。西藤・川端・寺嶋・米田(2018)は、バウムテストのような描画テストにおいて、発達障害に特徴的とされる描写はほかの精神疾患についてもみられる可能性があると指摘しており、バウムテストの指標とASDの傾向の関連を検討するためには、何らかの精神的な不調に関連する変数も考慮する必要がある。もう一点は、分析の手法である。村松(2018)はAQの各因子の平均値それぞれについて、バウムテストの指標の有無でそれぞれ2群に分けて検定を繰り返していたが、この方法は検定による誤差を増幅させて、何らかのエラーを発生させている可能性もある。バウムテストの指標については54の指標が提案されているなど数多くあるが(中島, 2018)、そのそれぞれについて検討を加えるよりも、多変量解析によって関連があると考えられる指標を同時に検討することで統計的な誤差を最小限に抑えることができるものと考えられる。よって、成人期のASD傾向とバウムテストの指標の関連については検討の余地が残されており、より精緻な検討を行っていくことで、バウムテストの理解に新たなエビデンスをもたらすことが期待できる。

発達障害の障害の自閉スペクトラム特性とバウムテストの関係性の検討については児童に集中している現状があり、バウムテストと成人期の軽度ASD症状の関連についてまで検討したものについては未だ数少ない。成人期になってからASDであったとわかるケースは少なくなく、また臨床においては主訴こそ自閉の傾向と関係がなくともケースの進行につれて結果的にASDの特性によって困り感が生じている場合もあり、簡便なアセスメントによって成人のASD傾向の測定の参考になる知見を蓄積することは臨床を進めていくうえでも大いに意義がある。

そこで本研究では、ASD特性とバウムテストの関連性を数量的に検討し、バウムテストの実施における解釈の参考となる知見を提供することを目的とする。

実施内容・方法

質問紙調査とバウムテストを、筆者及び臨床心理士が講師を務める外部の専門学校及び短期大学、大学の心理学の授業で行った(n=110)。質問紙調査は持ち帰って回答をお願いし、バウムテストは研究目的も含むということを説明したうえで、投影法の授業の一環として実施した。

バウムテストの実施に際しては、初めにこれから行う調査の説明を行い、質問紙の表紙にチェックを記入する形で同意を得た。説明の際には資料1の資料を用いる。調査は2回に分けて行い、1回目に質問紙調査、2回目にバウムテストの実施とする。バウムテスト実施後、デブリーフィングとして、バウムテストの解釈についての解説を行い、その後テ

スト結果及び質問紙を回収する。

質問紙は以下のものを使用した：

I : AQ 日本語版 (若林・東條、2004) : 自閉スペクトラム傾向の測定に使用した。50 項目で、0~1 の 2 件法である。全体的な ASD 傾向のカットオフ値として合計得点が 33 点以上であることが設定されている。また ASD の鑑別そのものの使用は推奨されていないものの、ASD の持つ特性要因として 5 因子 (「社会的スキル : カットオフ 6 点」「注意の切り替え : カットオフ 7 点」「細部への関心 : カットオフ無し」「コミュニケーション : カットオフ 7 点」「想像力 : カットオフ 7 点」) が想定されている。

V K6 (kessler, 2002) : 一般的な精神不調について測定する。6 項目で、0~4 の 5 件法であった。

バウムテストの指標は Koch (1957/2010) の 54 指標を使用した。バウムテストの提唱者である Koch の指標を中島 (2016) が発達指標として用いることを提案しており、発達特性の関連性を検討する本研究の目的に沿うものであると判断した。

得られたバウムテストの評定は以下のように行った。中島 (2016) で示された Koch の 54 指標の分類表を参考として、筆者を含めた臨床心理士 6 名で各自指標に合致する項目を評定し、その後合議を行って、合意の得られた項目を最終評定とした。

結果

まず、バウムテストの指標と ASD 傾向の関連性を検討するため、AQ の合計得点及び各因子とバウムテストの各指標でフィッシャーの直接法を行ったところ、AQ の「注意の切り替え」と「コミュニケーション」の因子が、バウムテストのいくつかの指標と有意な関連がみられた。続いて、AQ の因子の関連の見られたバウムテストの指標について、精神不調を統制した場合に多変量解析においても AQ の得点を説明できているかを検討するため、「注意の切り替え」と「コミュニケーション」のカットオフ値に該当しているかどうかを 0 か 1 として、それぞれを従属変数としたロジスティック重回帰分析を行った。その結果、「注意の切り替え」に対してバウムテストの「全 2 線枝 (すべての枝の描写が 2 つの線になっている)」の効果が有意で (Odds Ratio = 3.47, $p = .01$)、バウムテストの中の枝の描写がすべて二線であった場合、こだわりの強さなど注意の切り替えの困難さを持つリスクが 3.4 倍程度あることが示唆された。また、「コミュニケーション」に対してバウムテストの「管状枝 (枝の先が閉じられてなく、開いている)」の効果が有意で (Odds Ratio = .05, $p < .001$)、枝先の開放がみられないとき、コミュニケーションの困難を持つリスクが 2 倍程度

今後の課題

本研究によって、複数のバウムテストの指標と精神不調の存在を考慮に入れたとしても、いくつかの指標が ASD 傾向の存在を示唆しうることが示された。特に枝の描写に発

達特性との関連が考えられ、ASD 傾向を確認する際には、バウムの枝の部分について注目することが有益となることが考えられる。

本研究にはいくつかの制限がある。一つは、今回の結果の取り扱い方についてである。本研究によってある程度バウムテストの持つ ASD 傾向の判別可能性について数量的な背目デンスを示すことができたと考えられるが。バウムテストの解釈そのものについては気全体の印象や形式分析など、そのほかの情報も総合して行われる必要がある (Koch, 1957/2010)。そのため、本研究の結果は指標の解釈の仕方に ASD の傾向を見る際の参考とするとどめ、指標を利用しながら解釈を行うことが必要であろう。今後は、より総合的な観点による検討が必要となる。もう一点は、サンプルの性質についてである。本研究のサンプルは大学生を対象としており、一般社会人を対象としたものではない。今後成人期のバウムテストを見ていくうえでも、学生以外の成人期についてもさらなる検討が必要である。